平成20年度卒業式における学長式辞（平成21年3月25日）

本日ここに、学士の称号を得られた皆さんを迎え、平成20年度卒業式を執り行うことができましたことは、埼玉大学全体の喜びとするところであります。

本年度の卒業生は、教養学部201名、教育学部478名、経済学部357名、理学部201名、工学部429名、合計1,666名であります。この中には、留学生として祖国を離れ、慣れない日本の地で学業に励んできた人、51名が含まれております。経済的困難や病気を抱えながら、並々ならぬ努力によって今日に辿り着いた人も少なからずいます。皆さん、ご卒業本当におめでとうございます。また、長年にわたってご子息の勉学を支えてこられたご家族の方々に対しましても、これまでのご労苦に敬意を表するとともに、心からお祝い申し上げたいと存じます。

さて、皆さんのなかには大学院に進む人もいるでしょうが、大多数の人は直ちに実社会に入り、社会人として新しい生活を始めることとなります。いずれにせよ、皆さんはそれぞれに、これからの人生への決意を固めていることと思います。しかし、同時に不安も感じていることでしょう。

振り返りますと、日本の「失われた十年」は、1991年、皆さんの幼少時に始まっています。かつて日本が高度成長を謳歌していた時代には、所属することで安心できる場、頼りにできる組織がありましたが、90年代にそれらは崩れました。このとき登場したのが、経済・社会のあらゆる領域で、市場原理の徹底と浸透を図るというアメリカ・モデルの改革でしたが、それは、勝ち組・負け組に二分するシビアな競争を、あらゆる組織・個人に強いるものでした。その結果、格差が社会問題化し、日本は不信と不安の時代に入ってきたのです。

そこに、今般、世界経済危機が加わりました。今回の危機は米国のサブプライムローン問題を引き金にして金融市場から起こり、それが実体経済へと波及し、そしてグローバル化した金融システムを介して瞬く間に世界的な危機へと発展しました。この経済危機はまことに深刻です。こういうとき真っ先に犠牲になるのが弱者であり、テレビで毎日のように報じられましたように日本では昨年末から職を失ったうえに、寒風をさける住居まで無くすという人が増えました。企業業績と雇用の悪化を示す数字が、今も日に日に更新されています。

このように言いますと、世界経済危機によって私たちが暮らす日本社会が奈落の底に沈んでいくような印象を与えるかもしれません。しかし、それは私の本意ではありません。私たちは、今回の世界経済危機の意味を少し考えてみる必要があります。今回の経済危機が「百年に一度の危機」と形容されるのは、いうまでもなく、不況がいつ底を打つか予測できないほど危機が深いからですが、しかし、もう一面を見なければなりません。それは、経済と社会の再生のためには革命的な構造転換が必要だと多くの人が感じていることです。

20世紀の百年間、大量工業生産と市場経済の世界的展開は、物質的に豊かな生活、都市

化した生活へと人間社会を変化させ、その変化がまた人間の欲求を開花させてきました。こうして進む人間の欲求の暴走は、地球規模での環境問題、資源の枯渇、南北格差問題、その他さまざまな問題を生み出してきたことは、皆さんもよく知っていると思います。とくに環境問題は深刻であり、今、人類を含む地球上の生物の生存そのものが危うくなるところまで来ています。したがって、今回の経済危機からの脱出を、単に過去に復帰するだけのものとして行うことはできません。盛んに議論されていることですので、皆さんもおわかりかと思いますが、課題は二つあります。一つは危機を広げた、金融中心の市場経済システムを見直すことです。もう一つが、経済再生の課題と地球環境劣化、南北格差拡大などの問題を解決し、持続可能な発展を可能にするという世界的共通課題を同時に達成できるスキームを具体化することです。こういう課題への挑戦はすでに様々な形で始まっています。今回の世界経済危機の元凶となった米国で、歴史上最初の黒人大統領になったバラク・オバマは We must change と言って「グリーン・ニューディール」戦略を打ち出しました。環境への投資で雇用を創出するというこの戦略は、アメリカ再生プランの中心に位置づけられており、その実施と効果については楽観を許しませんが、世界の注目を集めています。米国はこれまで地球環境問題の解決に非協力的でしたが、それが変わる可能性が出てきました。

卒業生の皆さん。皆さんは、短期の動向に一喜一憂するのではなく、こういう百年に一度の歴史的転換期に、新しい人生を歩み始めるということを自覚してもらいたいと思います。そして、皆さんにその役割を引き受けてもらいたいと私が願うのは、change, 変革の担い手としての役です。皆さんが今後どこで働くことになるにせよ、どこに生活の拠点を構えることになるにせよ、その場、その場で変革の担い手が必要とされてきます。その役を自分から進んで引き受けていってもらいたいのです。

高度消費社会の住人という在り方に染まってしまった私たちは、問題が大きいほど、それを生み出すシステムの変革を他人の手に委ね、自分はその果実だけを享受するという思考・行動様式に陥る危険があります。もちろん、期待が裏切られた時は、異議申し立てという行為に出ることはありえます。その先端的な行為者として、生活の場でも、教育の場でも、いまクレーマーが増えています。たしかに、サービスを提供する行政に対して、学校に対して、あるいは企業に対して苦情をぶつける行為は、サービスの質を向上させるために必要な行為の一つといって良いでしょう。しかし、私たちがそういう行為に終始していては、いつしか税金を払って、あるいは料金を払ってサービスを受けるだけの、単なるサービスの受益者、サービスの消費者という受け身の存在に自分をおとしめることになります。変革の責任を他人に押しつけ、問題は誰か他の人、どこかの組織がいずれ解決してくれるだろうと待っているだけでは、またまた期待を裏切られることになるでしょう。

皆さんが、埼玉大学に学んで得た知恵と力は、変革の担い手としての役割を果たす際の原動力となるはずです。しかし、どういう組織も、どういう場も、異質な考え方をする多様な人々で構成されています。そういう組織、そういう場、そしてそういう社会を変革す

るには、他者を理解し、自分を理解してもらう、そういう営みの繰り返しを通して合意を形成していくことが必要となります。皆さんは、最初はこういう変革のための下支えする仕事をしなければなりませんが、やがてはそのリーダーとして嘱望される人に成長していってもらいたいものです。

ノーベル文学賞を受賞したロマン・ロランは、1919年に発表した『先駆者たち』の中でこう言いました。「理想主義のない現実主義は無意味である。現実主義のない理想主義は無血液である」。どの格言集にも載っている有名な言葉ですので、皆さんもきっとどこかで聞いたことがあるでしょう。皆さん、自分の足場をしっかり見つめ、リアルに、そして理想に向かって、進んでください。

以上、私が卒業生の皆さんに希望することを申し上げましたが、本日は、昨年度まで本学教授として活躍され、皆さんもよくご存じの山口仲美先生に特別講演をお願いしております。皆さんを送り出す日にふさわしい、楽しいお話をして下さると思いますので、期待してください。

最後になりましたが、皆さん一人ひとりの将来が幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られることを祈念して、私の式辞といたします。

平成 21 年 3 月 25 日

埼玉大学長　上井喜彦